

パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について

石濱 裕美子

はじめに

元朝におけるチベット仏教の興隆は周知のことであり、ことにフビライの帝師であるパクパの事績に対しては従来数々の言及がなされてきた。また、フビライとパクパの伝説は時代を超えてモンゴル、満州の歴史に大きな作用を及ぼしたことも忘れてはならない⁽¹⁾。しかし、この両者が、その在世の間に実際どのような考えを持ち、その考えに基づいた仏教儀礼はどのようなものであり、パクパの思想の中でフビライはどのように位置づけられていたのか等という問題は意外にも従来明らかにされていなかった。それは従来の研究が全て歴史学的アプローチによっており、思想的系譜や仏教文献学的な視点からのアプローチがなされていなかったためである。

本稿ではフビライの王権像を、宮廷仏事の面 (I) と、この仏教儀礼を演出した帝師パクパの著作 (II) から明らかにするものである。

I. 宮廷仏事に見るフビライの王権像

(1) パクパ在世時のフビライ宮廷の佛事

以下にパクパ在世時の元朝の国家儀礼に関係すると思われる佛事を年代順に掲げる。特に記載のない場合は『元史』巻六～十・世祖本紀に基づく。

- 1260 中統元年秋七月 神主を聖安寺に移す (『元史』巻七四・祭祀志三・宗廟上 p.7444d)。
十二月 パクパ、国師就任 (p.7246b)。
- 1261 中統二年 九月 祖宗の神主を聖安寺に移す (p.7247a)。
- 1262 中統三年十一月 聖安寺に勅して佛頂金輪会を行う。長春宮に金籙の周天醮を設ける (p.7248c)。
- 1264 中統五年 八月 燕京を中都と改称 (『元史』巻五八・地理志・地理一 p.7394c)。元号至元に改称。
- 1267 至元四年 大都建設始まる (同上 p.7394c)。
パクパの勧めにより王座の上に白傘蓋を、また、崇天門の右の鉄柱に金輪を置く (『析津志輯佚』北京古籍出版社 1983 p.214)。
- 1269 至元六年十二月 国師に命じて、太廟において佛事を始める (『元史』巻七四・祭祀三・宗廟上 p.7444d)。
- 1270 至元七年 パクパ、帝師就任。
パクパの勧めにより、大明殿の玉座上に白傘蓋を置く。この年以後、

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

毎歳二月十五日に白傘蓋の佛事を行う（『元史』卷七七祭祀六・國俗舊禮 p.7455d~7456a）。

- 十二月 大護国仁王寺、着工（p.7253c）。
- 1271 至元八年十一月 国号を元と改める（p.7254b）。
- 1272 至元九年 七月 都城に僧を集めて大藏經九会を讀誦させる（p.7254d）。
- 十二月 大聖壽萬安寺、着工（p.7255b）。
- 1273 至元十年 三月 皇后・皇太子冊立、天下に詔す（p.7255c, cf. 朱 1990 p.45）。
- 1274 至元十一年正月 正殿告成（p.7256a, cf. 朱 1990 p.33）。
- 三月 パクパ帰藏、弟のリンチェン襲位（p.7256b）。
- （同月）大護国仁王寺、竣工（p.7256b）。
- 1276 至元十三年九月 リンチェンに命じて佛事を太廟で行う（p.7260b）。
- 1279 至元十六年六月 五台山において佛事を行う（p.7264a）。
- 七月 散都に命じて十五日に佛事を行なう（p.7264b）。
- 十二月 聖壽萬安寺、竣工（p.7264d『仏祖』p.433では1277年）。

次節では、佛事の背景となった思想について検討していきたい。

(2) 佛事の背景にある佛頂系陀羅尼信仰について

(a) 崇天門の金輪

まず、至元四年に、フビライがパクパの要請によって崇天門に金輪を掲げた記事から検討する。

至元丁卯四年、世祖皇帝用帝師班言、置白傘蓋於御座之上、以鎮邦國。仍置金輪於崇天門之右鐵柱高數丈、以鐵絙四繫之、以表金轉輪王統制四天下。皆從帝師之請也（『析津志輯佚』北京古籍出版社 1983, p.214 : Cf. 中村 1993, pp.70-71）。

ここに見える金轉輪王とは仏典に現れる理想的帝王、轉輪聖王の一種である⁽²⁾。轉輪聖王（梵 cakravartin, 藏 'khor lo bsgyur ba）とは輪（cakra, 'khor lo）を転ずるもの（vartin, bsgyur ba）という意味であり、その名の通り輪⁽³⁾によってこの世を席捲し、その治世には輪宝、珠寶、玉女宝、主藏臣宝、主兵臣宝、馬宝、象宝、の七つの宝（輪王七宝、rgyal srid sna bdun）が現れると言われている。轉輪聖王のうち全世界を構成する四つの大陸（四大部洲）のうち、四つまでを支配する王が金輪王である。

崇天門は現在の午門にあたる宮城の正面玄関であり、ここに金輪を掲げたことはフビライが四大部洲（四天下）を支配する金輪王（金轉輪王）であることを百官、内外の使節に知らしめる意味があったことであろう。このように、崇天門の金輪はフビライが金輪王であることを示しているが、崇天門に掲げられた金輪には、もう一つの密教的な意味がある可能性を以下に述べたい。

(b) 佛頂金輪會と白傘蓋の佛事の典拠となった佛頂系密教經典

中統三年に行なわれた佛頂金輪會の本尊となる一字金輪佛頂と、至元四年ないし七年に始まったとされる白傘蓋の佛事の本尊となる白傘蓋佛母は、いずれも、佛頂系の經典に説かれる仏であ

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

る。佛頂系の仏とはシャカムニが瞑想に入った時、その頭頂 (uṣṇīśa 肉髻) から出現した陀羅尼が尊格化したものである。悟りを得たシャカムニの身体にあってその頭頂は悟りをシンボライズする一番尊貴な部分である。このシャカムニの肉髻から現れた佛頂系の仏の中で、代表的なものは『佛頂尊勝陀羅尼』(『至元法録』no.580-586, 『大正』no.967-971) が尊格化した尊勝仏母、『白傘蓋大佛頂陀羅尼經』が尊格化した白傘蓋佛母、それから一字金輪佛頂である。

これらの佛頂系經典は元朝において盛行していたと見られ、『元史』卷二百二・釈老傳の佛事名目中には、サンスクリット語で尊勝仏母 (vijaya) を音写した濱匠雅や、チベット語で白傘蓋 (gdugs dkar) を音写した都克噶爾等の名前が見える。また、居庸関碑文に刻まれた陀羅尼は『佛頂尊勝陀羅尼』である。また、科爾羅普爾普總は大輪金剛陀羅尼という中国名があたっていることから、輪王ダラニを意味するチベット語 ('khor lo bsgyur ba gzungs) をそのまま音写したものであろう(『元史』卷二百二・釈老傳 p.7756d)。

ここで、前説の金輪王について考えて見よう。シャカムニが頭頂から陀羅尼を生み出す時には佛頂如来という姿となる。佛頂系の密教について研究された三崎良周氏によれば、この「佛頂如来とは、一般には佛頂輪王と称され、その種字が bhrūm の一字であることから、一字佛頂輪王とも号されている。また後にも言及するが、佛頂如来と称する佛に、三佛頂、五佛頂、八佛頂等があり、その中の最尊であり中心とされるのが金輪佛頂であることから、一字金輪佛頂とも称せられる(三崎 p.114)」。と、佛頂如来が佛頂輪王あるいは一字金輪佛頂と称せられることを述べている。一方、モンゴル語を始めとする多言語の版が見つまっていることより、中国ばかりか内陸アジア全域で流行したと思われる『賢愚經』(damamūka, mdzangs blun kyi mdo. P. no.1008) には、コーサラ王の頂上から一童子が生まれ、その頂生の童子が後に王となり、七宝が具足して、転輪聖王となったという説話が記されている(Cf. 三崎 pp.123-124)。この二つの説話の構造と名称の相同性から、シャカムニの頂から生まれた佛頂系の仏は転輪聖王が尊格化・密教化したものであることをみてとれるであろう。

つまり、崇天門の金輪は金輪王を示すと同時に、金輪佛頂会の主尊である金輪佛頂を象徴したものであるとも考えられるのである。

次に、この両佛事の典拠となった経を、フビライの命によって至元二十二年から二十四年にかけて編纂された『至元法寶勘同總録』(『昭和法寶總目録』第二卷 no.25, pp.179-238 所収以下『至元法録』) に基づいて比定していきたい⁽⁴⁾。白傘蓋の佛事はチベット僧であるパクパが創設したものであることから、チベットないしサンスクリットテキストが存在しない經典は対象から除外した。傾向としては、白傘蓋佛頂や尊勝佛頂はサンスクリット・チベット諸本に多く、一字金輪佛頂系の經典は漢訳經典に多い(Cf. 三崎 p.118)。

金輪佛頂会の思想的典拠となった可能性のある經典は『最勝無比大徳金輪佛頂熾盛光消災吉兆陀羅尼經一卷』(唐天竺三藏大廣智不空譯『至元法録』no.727 『大正』no.963) か、『大威徳金輪佛頂熾盛光如来消除一切災難陀羅尼經一卷』(唐代失譯人名『至元法録』no.728 『大正』no.964) か、『菩提場所説一字頂輪王經五卷』(唐天竺三藏大廣智不空譯『至元法録』no.659 『大正』no.950) であろうか⁽⁵⁾。

また、白傘蓋の佛事の典拠となった經典は『白傘蓋大佛頂陀羅尼經』一卷(沙羅巴譯今編入録

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

『至元法録』no.790『大正』no.975)、並びに『佛說大白傘蓋總持陀羅尼經』(元天竺俊辯大師及譯主僧真智『大正』no.977)等が挙げられる。白傘蓋佛母についてはパクパが成就法を著している(SKK, no.147)。

(c) 白傘蓋の佛事の実際

次に、元朝における佛事の実相を、前述の經典類から解釈してみたい。金輪佛頂会はその名前が知られるのみで儀式次第が明らかではないため、ここでは、比較的実態の明らかとなっている白傘蓋佛事を検討していきたいと思う。

白傘蓋の佛事は帝師パクパの肝入りで創設された儀式であることが明記され、かつ、『元史』祭祀志の國俗舊禮や『析津志輯佚』歳紀の条において、毎年大變豪華な祭典が繰り広げられていたことが記されている(中村 1994, p.70) こと等から、フビライ宮廷の重要な仏教儀礼と思われるものである。以下に『元史』によって白傘蓋佛事の要略を引用しよう。

世祖至元七年、以帝師八思巴之言、於大明殿御座上、置白傘蓋一。頂用素段、泥金書梵字於其上。謂鎮伏邪魔、護安國利。自後每歲二月十五日、於大[明]殿、啓建白傘蓋佛事。用諸色儀仗社直、迎引傘蓋、周遊皇城内外、云與衆生祓除不祥、導迎福祉。……

十四日、帝師率梵僧五百人、於大明殿内建佛事。

至十五日、恭請傘蓋于御座、奉置寶輿、諸儀衛隊仗列于殿前、諸色社直暨諸壇面列于崇天門外、迎引出宮。至慶壽寺、具素食。食罷、起行。從西宮門外、垣海子南岸、入厚載紅門、由東華門過延春門而西。帝及后妃公主於玉[五]德殿門外、搭金脊吾[五]殿綵樓而觀覽焉。及諸隊儀社直送金傘還宮、復恭置御榻上。帝師僧衆作佛事(『元史』卷七七・祭祀六・國俗舊禮 p.7455d-7456a; Cf. 中村 1993, p.71)。

まず、前半部の下線部に描かれた、白傘蓋の上に記された梵字とは何であろうか。以下の二史料のうち、前者は『佛頂大白傘蓋陀羅尼總持經』から、後者はパクパの著した白傘蓋の成就法等から引用したものである。

於其空中華月輪上、想白色唵字。唵字放光、其光復迴、字種變成白傘金柄。柄上嚴唵字。其字放光復迴、字種變成白傘蓋佛母(『大正』no.977, p.404a)。

障りをなすものや魔を制圧する蓮華と日輪の中央には、自分の知を象徴する om の字がある。om の字から白い光が放たれ、その光は有情を利益してからもどってくる。その時、一切の如来の肉髻から出現した白傘蓋の無数の陀羅尼の文字も勸請される。[光と陀羅尼は]一味となり、そこから白傘蓋佛母が出現する。……身体の色は白く、金剛の結跏趺坐をしており、右手に施無畏印を結び、左手には国中の生きとし生けるものと臣下を覆う白傘蓋を持している(SKK, no.147, 77-1-2~77-2-6)。

この二つから白傘蓋の上に記された梵字は om であることを知ることができる。

また、上掲の白傘蓋佛事の記述の後半部には大明殿の玉座の上に安置されている白傘蓋が二月の十五日に玉座から宝輿に移され、時計回りに皇城を一周してから、また玉座に奉還されることが記されている。この儀式次第にどのような意味が存在したのかを以下に見て見よう。『佛頂大白傘蓋陀羅尼經』にはこの陀羅尼の効果を以下のように記している。

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

寶此佛頂大白傘蓋、無有能敵。般囉^二合當雞母陀羅尼、繫幢頂上、廣伸供養、作大佛事、奉迎斯呪、安城四門、或諸聚落都邑村野、禮拜恭敬一心供養、所有兵陣隨即消滅。疫癘諸病惱害鬪諍、他兵侵擾一切災厄悉皆消滅。〔佛頂大白傘蓋陀羅尼經〕〔大正〕no.976 p.403c)。白傘蓋陀羅尼を城の東西南北の門（四門）に奉迎すれば、あらゆる災難から国が護られるというこの經典の記述と、元朝の白傘蓋の佛事が皇城の四囲をめぐる点とは見事に対応している。

(3) 仏としてのフビライ

本節では、崇天門の金輪、金輪佛頂会、白傘蓋の佛事等から帰納されるフビライの王権像についてまとめてみたい。まず、フビライの王座の上に白傘蓋が置かれたことについて考察したい。白傘蓋佛母はシャカムニ如来の肉髻から出現した仏である。従って、フビライが白傘蓋佛母を出現させる母胎である佛頂如来、すなわち、轉輪聖王の密教化した姿、佛頂輪王ととらえられていた可能性をここに指摘したい。また、崇天門の金輪と金輪佛頂会は、フビライの金輪王、ないし、密教の金輪佛頂としての側面をあらわしているものと思われる。

従って、フビライは仏としての力から、その頂から白傘蓋佛頂や金輪佛頂をあらわして国土を護っていたという構造を知ることができるのである。このような仏としてのフビライの王権像は、フビライの時代に編纂された『至元法録』や、その後に編纂された『仏祖歴代通載』（『仏祖』）に容易に見出すことができる。

大元天子、佛身現世間、佛心治天下。（『至元法録』至元二十六年（1289）三月日杭州靈隱禪寺住持沙門淨伏序）

我世祖皇帝、即古佛示現之應身也。若夫飯僧、建刹造像、範金天下、讀誦藏經、資戒廣大施會。豈筆舌所可勝紀。（『至元法録』大德十年（1306）冬至日江西吉州路前官講報恩寺講經論釋克己序）

遂命大都報恩禪寺林泉倫長老下火、謝恩畢拈香云「佛心天子憫衆生、……此香端為祝延大元世主當今皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲。伏願金輪與法輪同轉。……」（『仏祖』p.456）

帝問揀壇主云「何處有佛」揀奏云「我皇即是佛」帝云「朕如何是佛」揀云「殺活在於手、乾坤掌上平」（『仏祖』p.463）

特に下線部は、フビライの法輪をまわす仏としての出世間の姿と、金輪をまわす世間の轉輪聖王としての姿の両側面をとらえていて興味深い。このように、仏としてのフビライが呪力によって元朝の国家を安泰に護るという意味が仏教儀礼の中には伏せられていたのである。以下の節では、これらの仏教儀礼を演出していたパクパの思想を見て行きたい。

II. パクパの著作群から見るモンゴル王統観の成熟過程

(1) 王統史観を含むパクパの著作

前章ではフビライ宮廷の仏教儀礼と、その場におけるフビライの位置を検討したが、本章ではこれらの儀式を演出したパクパ自身の著作から、モンゴル王統に対する捉え方の変遷を見て行きたいと思う。

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

パクパは多数の著作を残しているものの、そのほとんどは宗教的著作であり王権を真正面から論じたような政治的な著作は存在しない。しかし、王統に関して多少なりとも触れたものが、元朝の諸皇帝、王子、王妃に捧げられた文章の中に若干存在する。これらの著作は正月に送られた吉祥偈 (tshigs bcad pa)、王や王妃のあるべきようを誡めたもの (gdams pa)、書信 (spring yig)、諸王が経典を建立するに際して送った前文 (mtshon byed) 等に分類することができる。その分類の中では定式化が行なわれており、内容はほとんど同じである。これらのパクパの著作は福田氏 (福田, 1986, pp.52-72) がコロフォンに基づいて著作を年代順に配列し、重要な著作には解説を付す等の整理研究を行っている。また、後世に作成されたパクパの著作目録との題名の一致・不一致も全て挙げている (福田, 1986, pp.166-184)。

モンゴル王家が関係するパクパの著作の中から、フビライの王統に関する記述を含んだ史料を以下に年代順に掲げる。

- | | | | |
|------|-------|--------|--|
| 1265 | 6/14 | no.311 | 「王父子が仏塔を建立したことを称える著作」Cf. 王子チンキムを賞賛したもの。 |
| 1271 | 7/8 | no.210 | 「王を誡めた章」 |
| 1273 | 3/* | no.299 | 「ジビクテムルが『華嚴経』(P. no.761)、『金光明経』(P.174,175,176)、『十萬般若波羅蜜多経』を建立した際の前文」 |
| 1274 | 10/13 | no.300 | 「アロクチェが般若経を建立した章」 |
| 1275 | 2/24 | no.211 | 「[王を誡めた章] 要約」 |
| | 7/15 | no.301 | 「フビライが『大・中・小般若経』 ⁽⁶⁾ を建立した際の前文」 |
| | 8/8 | no.298 | 「マンガラ夫妻が『大・中・小般若経』と『華嚴経』を建立した際の前文」 |
| | 9/22 | no.312 | 「賞賛すべきものを賞賛した章」Cf. フビライを賞賛したもの。 |
| | 9/28 | no.154 | 「王を誡めた章の注釈」 |
| | */* | no.313 | 「チベットの王統を賞賛する偈」Cf. チンキムを賞賛したもの。 |
| 1276 | 2/14 | no.296 | 「宝なる法を建立した前文の章」 |
| 1277 | 6/25 | no.297 | 「宝なる正法が興隆する器を建立したことを称えるもの」チンキムに捧げられたもの。 |
| 1278 | 8/23 | no.1 | 「彰所知論」Cf. チンキムの勸めによって記された論書。 |
| | 10/5 | no.295 | 「善逝 (仏) の御言葉を全て建立したことを明らかにするもの」Cf. チンキムによる大蔵経建立によせて記された書。 |

ジビクテムルはフビライの伯父ゴダンの息子であり、チンキム、マンガラ、ノモハン、アロクチェは皆フビライの子である。ゴゴチェンはチンキムの妃である。

これによると、王統にふれた著作は没年 (1280年) 直前の十年間に集中していること、また、1278年に著作された『彰所知論』以外は、全て般若経の建立にまつわる著作 (福田, 1986, p.69) であることに気付く。般若経は顯教の代表的経典であることから、この前文に記されたフビライの姿には前節で述べたような密教的な側面は現れてこない。しかし、転輪聖王という言葉は、ある時期から現れて来ることを知ることができる。以下に、これらの著作に述べられている王統史観について具体的に見て行きたい。

(2) パクパの王統史観の変遷

(a) 初期 仏教年代観の中におけるモンゴル王統

No.311の著作はチンキムの仏塔建立に際して、勅命によってクパが1265年に著したものである。この著作の冒頭には、シャカ族の王(シャカムニ)の没後、沢山の王が現れたが、仏滅後3290年経過した後、それらの全てのものよりも力において王政において広大なチンギスハンがモンゴル族に現れた、という内容の記述がある。またそれに続いて、順次フビライとその諸子チンキム、マンガラ、ノモハンまでの王統が述べられている。オゴタイの没後にトゥルイ妃のソルカクタニベキの治世があったことに言及するなど(SKK, 284-3-2)、モンゴル王統の記述に詳しいことが特徴的である。

それからしばらくの著作は諸王諸妃に対して吉祥偈や手紙等が多く、その内容は概して諸経を引用した宗教的教誡ないし祝福である。

その後、1273年にジビクテムルが(no.299)、1274年にアロクチェが(no.300)、1275年にマンガラ夫妻(no.298)が施主となって続々と般若経の建立が行なわれた。その際にパクパがよせた著作の冒頭にはまず仏教年代論ともいべき劫の解説が行なわれている。たとえば、No.299を例にとってみよう。この著作には、我々の住む時代は賢劫(bskal pa bzang po)という時代であること、人間の寿命が100才になった時代にシャカムニ仏が出現したこと、仏教界には五百年ごとに変化が生じ、五千年たった十期目に滅亡すること、現在は七期目の五百年(lnga brgya bdun pa)であること等が説かれている⁽⁷⁾。また、仏の教えがこの世に存在する間には、さまざまな地に法王が出現し、中でも北方からチンギスハンが現れたことを述べる。他の著作もno.299程詳細ではないにしても、仏教年代観において七番目の五百年に北方からチンギスが現れた、という記述は必ず存在している。

さらに、チンギスに続いて、オゴデイ、グユク、モンケ、フビライと五代が共通して述べられており、続いて、施主に至る系譜が続いている。例えば、no.299のジビクテムルにあてた著作は、ジビクテムルがゴダンの息子なので、オゴタイの息子でありジビクテムルの父であるゴダンの名前が付加されている。また、アロクチェの場合(no.300)はフビライの息子としてマンガラ、ノモハン、アロクチェの名前も付加されている。マンガラ夫妻にあてた著作(no.298)にはマンガラの妃の名ブンダリまでが言及されている。

これらの著作に共通する特徴は、モンゴル王の出現を般若經典に基づく時間軸(第七期目の五百年間)と空間軸(世間の北方)の中で捉えていること、また、モンゴル王統はフビライまでの五代(ないしその一部が)が簡潔に定式化して述べられていること等である。

(b) 後期 転輪聖王思想の登場

1276年にチンキムとその子のためにパクパが著した著作にはモンゴル王統に対する新しい概念が現れる。それは前章で検討が行なわれた転輪聖王という言葉である⁽⁸⁾。

・・・その息子はグユクハンである。その方も人主になった。その父の御兄弟のモンケハンは力の輪をまわすもののごときになった。その弟はフビライといい善と真理の力によっ

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

て全地に権力をふるった。輪をまわすもののごときになった。・・・(SKK, no.296, 259-3-4~6)

さらに、1278年にチンキムの勧めによりパクパが著した『彰所知論』(SKK, no.1, 漢訳:『大正』no.1645, pp.226-237)において、今まで經典の序として単発的に述べられてきたパクパの王統観は始めて独立の著作に記されることとなった。ここには仏教の世界観・時間観・王統観・修行法が詳細に述べられ、モンゴル王統は仏教伝播の歴史の中にはっきり位置付けられている。パクパの著作の中で『彰所知論』のみが元朝期に即座に漢訳され、大蔵経に編入されたことは、パクパの王統観や教えが集約して述べられている記念碑的著作を、多くの人を知る必要があると当時判断されていたことを示していよう⁹⁾。

・・・仏が涅槃に入ってから三千二百五十年以上経過した時、北方のモンゴル国に古に功德を積んだ果が熟して、チンギス・ハンというものが現れた。その方は北方から始まって様々な言語の沢山の国を征服して、力によって輪を転ずるもののごときになったのである。その子息としては、・・・その末子はフビライと名高く、王に推戴されてからは前の方達よりも殊勝な王政をなされて、宝の教えの門に入って、王政を仏法に則って護り、シャカの教えも明らかになされたのである。・・・かくのごとくシャカの王統からはじまって、現在存在している王統まで等を説いたのである。・・・(SKK, no.1, 10-2-1~10-3-1)

文中においてチンギス・ハンを「力の輪を転ずるもの」と形容している。この一ヶ月後に記された著作(SKK, no.295)においても、フビライやその子チンキムも以下のように「轉輪王のごとく」になったと言及されている。

その弟フビライというものは、福德の威光によって、暗愚なものを圧倒し、言葉によって王政を護るものとなった。全ての經典に造詣深く、王政を仏法に則って護り、力によって地に権力を振るい、輪をまわすもののごとくになったのである。・・・その王の御長子はチンキム、妃はゴゴチェンである。チンキムは轉輪王の子息の如く、上流の徳と栄光を得て、信仰と慈悲によって飾られた御心によって、法の理に良く通じ、名声はあまねく響きわたったのである(SKK, no.295, 257-3-2~257-3-5)。

このように、パクパのモンゴル王統を仏教史に位置付ける作業は『彰所知論』に至って完成するのである。以上、パクパの著作から、フビライが轉輪聖王として位置付けられていく過程について述べた。

おわりに—大都の創建とフビライの王権—

『析津志輯佚』には、

国有清規、一遵西番教則(『析津志輯佚』p.211)。

と、元朝には清規というものがあり、それはチベットの規則に従っていたことが記されている。清規とはおそらく、チベットやモンゴル文化圏で用いられる政治・宗教という二つの則を意味する二規(qoyar yosun, lugs gnyis)のうち、宗教にかかわる則を漢訳した言葉であろう。この記事が事実を述べていることは、フビライが即位と同時にパクパを国師としたこと、『元史』の中統二年と至元十三年の記述から、元朝の祖宗は寺に祀られており、太廟が建立された後にもその祭祀

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

にはチベット僧が参加していたこと等から容易に知ることができる。

本稿では、パクパの助言によって崇天門にまつられた金輪 (I-(2)-a) やパクパの思想 (II) はフビライを仏教の理想的帝王、転輪聖王として表していること、また、パクパによって宮中で主宰された佛頂金輪会や白傘蓋の佛事 (I-(2)-c) の解釈から、フビライの王権が佛頂如来としての性格を有していた可能性があること等を明らかにした。これは、元朝の諸史料にフビライがしばしば仏として言及されていることとも一致する (I-(3))。これも「清規」がチベットの思想に従っていた事例の一つと言えよう。

最後に、これらの仏教儀礼が行なわれた時期と場所について注意を喚起しておきたい。パクパが白傘蓋を王座に置き、金輪をまつりはじめたところの至元四年の干支、丁卯は、チベットではシャカの没年にあたる干支とされ、いわば、仏教の甲子にあたる年である。シャカの没年を丙卯とすることはパクパの著書等からも根拠づけることができる (SKK, no.294, 256-1-5)。実は、この年の正月に大都の建設が始まっているのである。

歳は丁卯にあり、正月丁未の吉を以って、初めて大都を城く (『道園学古録』巻二三, 陳 p.58)。

四年、始めて中都の東北に今の城を置きて、都を遷す (『元史』巻五八・地理志・地理一 p.7394c)。

このように、首都の創建とフビライの王権像をチベット仏教思想の下に演出する作業は、仏教の甲子にあたる年に同時に始まっているのである。

この後、至元十年には 皇后・皇太子が冊立され、至元十一年正月には、大都の正殿が完成し、フビライはこの宮殿で初めて朝賀を受けている。この時期、仏教界にも大きな動きがあり、元朝の国家儀礼にとって重要な仏寺が次々と創建された。至元七年に着工、至元十一年に竣工した護国仁王寺は申村氏の最近の論稿により帝師の居所の寺であることが明らかにされた。また、至元九年に着工され、至元十六年に竣工した聖壽萬安寺は、即位や天壽節等の国家儀礼に先立つこと三日前に儀礼を演習した地である⁽¹⁰⁾。

一方、パクパの帝師就任は至元十一年のことであり、パクパの著書の中に転輪聖王の文字が出現し始めるのは至元十二年～十三年頃からである (II-(2)-b)。従って、帝師パクパの誕生と大都の完成は連動しているのである。以上の諸事から、大都創建の初期にあつて、チベット僧パクパの思想がある種の役割を果たしていたことを確認することもできよう。

注

- (1) この件については以下の拙稿に詳しい。「パンチェンラマと乾隆帝の会見の背景にある仏教思想について」『内陸アジア言語の研究』9、1994、pp.27-62; 「転輪聖王思想が藏蒙清関係に与えた影響について」『史滴』16、1994年、pp.59-64; 「『アルタン・ハーン伝』に見る十七世紀モンゴルの歴史認識について」『日本モンゴル学会紀要』25、1995年、pp.1-14。
- (2) 『阿毘達磨俱舍論』巻一二 (『大正』no.1558, p.64)
- (3) 転輪王のランクによって金銀銅鉄と輪の材質が落ちていく。また、鉄輪王は末世に現れ、力の輪をまわすものと言い換えられる場合がある。
- (4) 同目録は大藏經の諸言語 (漢梵藏) の版を校勘し、欠如があるものはこれを補い、無いものは書写するという作業がなされた際に作成された目録である。

—パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について—

- (5) チベット密教の専門家である田中公明氏によれば、サキヤ派の帝師のもとで、中国仏教で流行した金輪佛頂系の経典が流行したとは考えにくい。そのため、同じ佛頂系経典でもサキヤ派で重んじられた『悪趣清浄タントラ』(durgatiparisodhana, sbyong rgyud) の本尊 kun rig nam par snang mdzad (大日如来) を金輪佛頂と誤訳したのではないかとの御意見であった。『悪趣清浄タントラ』については、パクパの二代前のサキヤ派座主、タクパ・ゲンツェンが多くの著作を記している。
- (6) 『大般若経』は『十萬般若波羅蜜多経』 P. no.730、『中般若経』は『聖一萬八千般若波羅蜜多大乗経』 P. no.731、『小般若経』は『聖八千般若波羅蜜多経』 P. no.734 の通称である。
- (7) 仏教がこの世に留まる期間を5000年ととらえる思想は『大般若波羅蜜多経』中に述べられる思想である (DZG, p.762)。
- (8) 厳密に言えばその前年の1275年のフビライの讚歌 (SKK, no.312) に「汝の栄光によって王政は各々堅くまとまるようになった。轉輪聖王の偉大な栄光によって四洲を一つにまとめるごときである。(SKK, 285-3-3)」と、轉輪王に触れた記述がある。また、日付はないがno.313にも轉輪王やアショカ王の名前を見出すことができる。この前後の著作は1275年に書かれているために、no.313も同年に書かれた可能性がある。
- (9) 『彰所知論』の漢訳は『至元録』の開版された大徳丙午十月(1306年)に行なわれている。漢訳の結果、元朝期に編纂された仏教史『佛祖』(1341年成書)の冒頭に引用される等、中国仏教史の記述にも影響を与える事となった。
- (10) 『元史』卷六七・禮樂一「元正受朝儀」「天壽節受朝儀」「郊廟禮也受朝儀」「皇帝即位受朝儀」。

略号表並びに参考文献

- (SSK) chos rgyal 'phags pa'i bka' 'bum, Sa skya bka' 'bum, vols.6~7, Toyo Bunko: 1968.
 (DZG) mdzod 'grel mngon pa'i rgyan, mchims 'jam pa'i dbyangs, 中国藏学研究中心:1989.
 (P) 『西藏大藏経』北京版
 『元史』『二十五史』九卷 pp.7231~7773, 上海古籍出版社
 『仏祖』『佛祖歴代通載』元・念常 新文豊出版公司, 中華民國六十四年(『大正』no.2036)
 『大正』『大正新脩大藏経』

陳高華『元の大都』中公新書: 昭和59.

朱契『元大都宮殿圖考』北京古籍出版社:1990.

三崎良周『台密の研究』同朋社出版.

中村淳「元代法旨に見える歴代帝師の居所」『待兼山論叢』27 史学編: 1993, pp.57-82.

福田洋一・石濱裕美子『西藏仏教宗義研究 第四卷—トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』東洋文庫: 1986.